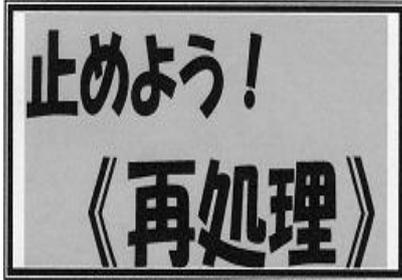
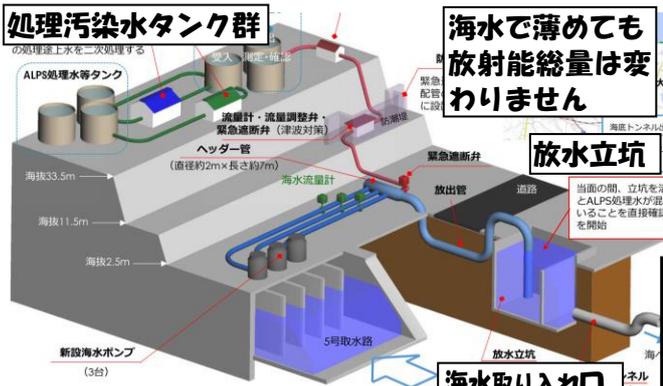


**三陸の海を放射能から守る
岩手の会**（略称）三陸の海・岩手の会
郵便振替 02240-5-102650
ホームページ《再処理 / 岩手の環境》
http://sanriku.my.coocan.jp/
《本紙の全バックナンバー掲載》



《天恵の海》
2021(令和 3年)
9月 21日
第223号
編集事務局 S. Oshida
TEL・FAX 019-623-1636

ALPS 処理汚染水 原発沖約1km、水深12mの海底から放出!



東京電力は八月二四日、福島第一原発事故で発生したALPS（多核種除去設備）処理汚染水についての海洋放出の具体的計画案を公表しました。東京電力ホームページの『多核種除去設備等処理水の取扱いに関する検討状況（概要）』によると、福島原発から沖合約一キロまで海底トンネルを通して放水立坑と沖合を結び約一二メートルの海底から、海水で薄めた汚染水を放出するとしています。

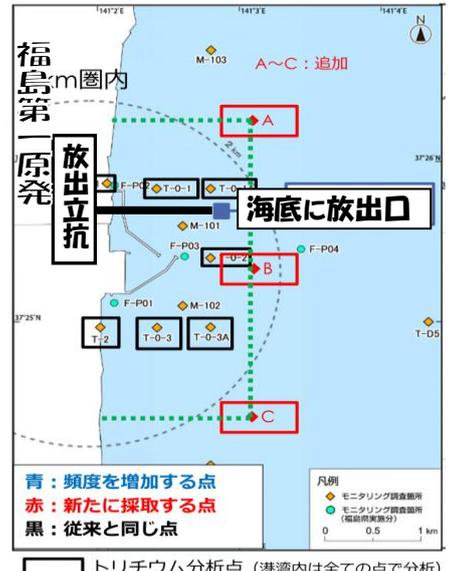
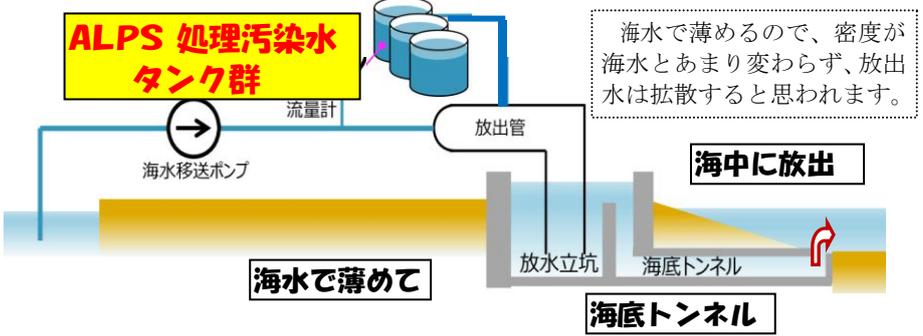
東電・ホームページ
d210826_06-j.pdf (tepcoco.jp)

放出のサンプリングが困難

汚染水の海洋拡散と環境アセスの公開を!

東電の発表した図に見るように汚染水の海洋放出計画案はわざわざ沖合までトンネルを掘って海底から放出します。これは住民の安全の為ではなく、沖合海底深く放出することにより拡散させ、表面のサンプリングで検出しにくくさせるためです。潮流による汚染水拡散のシミュレーションとアセスを情報公開し民意を問うべきです。

測定は主要七核種のみ
東電ポータルサイトが公表した放射能汚染水は現在一七万立方メートルあり、そのうち約六九%を「処理途上水」としています。線量限度一ミリシーベルト／年の数倍から二万倍に迫る高濃度の汚染水で、ストロンチウム90やセシウム137など危険な核種が含まれています。さらにトリチウムについては除去出来ないとされ、約八〇兆ベクレルも含まれています。



多核種除去設備では解決できない
忘れてはならないことは、この「汚染水」は事故によって破壊された炉心を循環した「地下水」であることです。放射性核種のみならず、地下水の泥や事故時注入した海水の塩分、さらには炉心材料の金属片も混るといいます。『「サリ」（セシウム除去装置）」から「ALPS」まで』、緊急の対策を担ってきた現場技術者・作業員の苦闘は計り知れないものがあります。しかし「トリチウムの除去」は多核種除去設備では不可能です。海には絶対に流さないという方針で「巨大タンク設置」や「コンクリート固化」方針への転換が必要です。

関係閣僚会議開催 ALPS処理水対策

「新たな安全神話」として「風評被害」

最初から風評被害を想定

政府は八月二四日関係閣僚会議を開き、反対する漁業者へ答える形でALPS処理汚染水の海洋放出に伴う当面の風評対策をまとめました。

①漁業者向けの基金を創設し、一時的に冷凍できる水産物を買取り市況の回復を待って販売する。

②東電が被害実態に見合った賠償を実施。

③IAEA（国際原子力機関）による安全性の検証要請。

③については、すでに九月六日に事務次長が来日し、十二月にも調査団を派遣する方針を明らかにして、政府との協力体制が見取れます。

異様なのは予定の二年前前に「風評被害」が起こることを想定し、基金を創設してまで海洋放出しようとしてい

ることです。トリチウムの有害性（「天恵の海」二〇号、二一七号、二二二号、二二三号）に

ついては様々な議論があり、わからないことが多いにも関わらず、それらを一切無視して問題はないとするところ

に、福島第一原発事故以前の「安全神話」の復活が垣間見えます。事故は起こっても安心、とする「安全神話」

事故以前の「安全神話」が事故は起こらないから安全としたのに対し、現在は事故が起こっても安心、とするところが姑息です。

「風評対策」には大消費地での説明会やイベントの開催、流通業者への説明、各国政府への安全性の説明など、安心の為の情報発信の必要性が多く盛り込まれていて、「原子力ムラ」健在を印象づけます。騙されないことが大事です。

海底からの放出は放射能濃度隠した！

公表されたALPS処理汚染水の海洋放出計画案は、沖合いの海底から放出するもので再処理工場と同じです。六ヶ所再処理工場では、図①のように沖合い三km、深さ約四〇mの海底の内径約七・五mの管から上向きに約五・六リットル/秒で、トリチウムを主とする汚染水（淡水）を放出します。なぜ政府や東電・原燃はこのような海洋沖合海底放出方式を採用するのでしょうか？ それは放出口からのサンプリングを困難にし、仮に高濃度の汚染水を流しても分からなくなるからです。

『天恵の海』第186号
2018.2.4発行 から

トリチウムを多量に流したのに

図②は、アクティブ試験が行われていた二〇〇七年一〇月の日本原燃のホームページのトリチウム放出実績データです。一〇回（一日一回）に亘って計五八〇〇立方メートル、五二三兆ベクレルものトリチウムが流されました。

モニタリングの検出値はND

図③は、一〇月三日と一〇日に行われた青森県と原燃の実施した海水中のトリチウムのモニタリング検査報告です。トリチウム濃度は六サンプルの全てで「ND（不検出・検出限界値（二ベクレル/リットル）以下）」とあります。

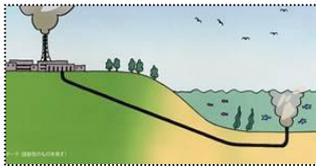
東通原発沖で四ベクレル検出？

ところが同じ図③の一〇月一〇日には、青森県・原燃の採取地点より遠い北へ二五キロの東北電力東通原発沖合いで「四ベクレル/リットル」が検出されています。この原因は再処理工場からのものであることを原燃も認めているのです。なぜ青森県・原燃が調べた放出口直上、南北五キロ、二〇キロ地点では検出されなかったのでしょうか？ アクティブ試験燃料せん断処理が行われた三年間の海水五〇〇六〇回のモニタリングでも全て同じNDでした。

データ操作の疑い、消えず

この事について私達は原燃に何度もデータ操作の疑惑も含め説明を求めましたが、「法に則り調べている」との回答だけです。この例から、福島第一原発汚染水の海洋放出についても海水のトリチウム濃度で不都合なデータが操作される可能性があることに注意しなければなりません。

図①：六ヶ所再処理工場の海底放出口



図③

公開されているモニタリング報告
2007(平成19)年10月：海水のトリチウム

日	試料	実施者	地点	トリチウム濃度(Bq/l)
3日	海水	青森県	六ヶ所放出口付近	ND
			上記北20°付近	ND
			上記南20°付近	ND
10日	海水	日本原燃	六ヶ所放出口付近	ND
			上記北5°付近	ND
			上記南5°付近	ND
10日	海水	東北電力	東通原発放出口付近	4
			上記放出口沖	3
23日	魚類自由水	青森県	六ヶ所村前面海域	2

*10日 東北電力による 東通原発排水の調査
*23日 青森県による魚類検査 結果ND(単位Bq/kg生)

図②

多量のトリチウムが流された！

2007(平成19)年10月：10回投棄

日	排水量	トリチウムの量	トリチウム濃度
	立法リ	兆ベクレル	億ベクレル/l
2日	585	99	1.7
4日	585	85	1.5
6日	586	83	1.4
11日	584	70	1.2
13日	586	50	0.85
17日	575	0.024	0.00042
18日	587	52	0.89
19日	543	52	0.96
27日	582	19	0.33
31日	586	13	0.22
計	5799	523.	

『海洋放出廃液の詳細データ』は下記。
<http://sanriku.my.coocan.jp/07.4.1-08.3.31.pdf>